



井上 慶真	
お浄土への旅	1
柳川 眞諦	
「いのち」の還る場所	11
米澤 信道	
春の七草と若菜摘みに思う	21
普賢 保之	
春彼岸	31

本文中、『浄土真宗聖典(註釈版)第二版』は『註釈版聖典』と略記しております。

表紙絵・挿絵／羽尻利門

## お浄土への旅

井上 慶真

### ●旅に出る

葬儀のおつとめが終わわり、お斎とぎ(仏事の際の食事のこと)をいただく  
ている場面でのことなのです。

「えまんころ、どの辺までえつただえ。三途さんずの川は、へえ、渡つた  
んかえ」(今頃、亡き人はどの辺りまでいったのでしょうか。三途の川は、  
もう渡つたんでしょうか)

僧侶である私の席までお酌しやくに来て、このように尋ねる方が時々いらっしゃいます。決して冗談めかした雰囲気ではなく、割と真剣な表情で聞いてきます。おそらくは、亡き人が「いくところ」に向かって、きちんと迷わずに進んでいるだろうかと心配しているらっしゃるのだと思います。葬儀は、亡くなったその日ではなく、数日経ってから執り行われることが多いので、その数日分きちんと前進しているだろうかと気にかけていらっしゃるのでしょうか。「いくところ」にちゃんといけるだろうか、あるいはまた、そちらに向かって進んでいるだろうかと心配する気持ちもよくわかります。

葬儀の時の挨拶や弔辞ちゆうじ、弔電ちゆうでんなどの表現からは、死んでから旅立つ、旅に出るといった見方が圧倒的に強いということがうかがえます。普通に

考えれば、命終わったあとで旅に出るといった見方のほうが、私たちにはある意味でしっくりくるのかも知れません。死んだあと亡き人が、とりあえずどこかへ向かって旅立つと、漠然と考えている方が多いのではないかと思います。

### ●お棺の中に

出棺の時、私たちの地域では、



お棺の中にお花を入れて亡き人に最後のお別れをします。葬儀に関する一連の流れの中でも、非常に切なく、つらいのがこの出棺の場面ではないでしょうか。亡き人に対する各々のおのおの関係性において、各々の思い出、各々の悲しみの色があることを知らされます。お花を入れながら、万感の思いを込めて言葉をかける方もいらっしゃいます。亡き人の頬を手のひらで優しくなでながら、大粒の涙をぼろぼろとこぼして、感謝の意を伝える人もいます。また、悲しさのあまり、泣き崩れながらお棺にしがみついて離れずに、「いかないで」と繰り返す人も。各々の悲しみの色がそこにあります。

浄土真宗以外の宗旨でつとまる葬儀の中には、お棺の中に、いわゆる旅装束といわれる品物を入れることがあると聞いています。それはつえ、わらじ、手甲てっこう、脚絆きゃはん、そして三途の川の船賃である六文銭などだそうです。死んでから旅に出るとすれば、新しいわらじもつえも必要だろうし、三途の川もきちんと渡れるように船賃も入れてあげなくてはという優しい心持ちであると思います。その旅が、死後のことであり、自分一人で、自分の力で歩んでいくのだとすれば、そのような品物を入れるのはうなずけます。

しかし、私たちの親鸞聖人は全く違う仏道をお示しく下さいました。親鸞聖人の教えをいただく私たちにとっては、旅は死後ではなく、紛れもない「いま」であり、また、一人旅ではなく、阿弥陀さまとともに歩む旅だと聞かせていただいております。そして、「いくところ」というような漠然としたものではなく、阿弥陀さまがこの私一人のためにご用